

第 344 回例会 (オンライン開催)

発表者 川上夏林 (東京外国語大学／大東文化大学／武蔵大学 非常勤講師)

フランス語心理動詞の認知機能的考察
—経験者直接目的語型とその過去分詞形を対象にして—

概要

本研究では、*énervé* や *agacé* のように心的事態の経験者が直接目的語に置かれる心理動詞(以下、直接目的語型心理動詞)と、その過去分詞形(e.g. *Je suis énervé.*)を分析対象とする。人称制約と時制制約がかかる現象に着目して、直接目的語型心理動詞が置かれる文の構文論的特徴とその機能面から、直接目的語型心理動詞がいくつかのタイプに分けられることを発話行為論の枠組から論じる。具体的には、発話主体が発話時に経験する心的事態を表す表出型と、ある主体が経験する心的事態を知識や情報として聞き手に伝達することをその主たる機能とする演述型の 2 つに分かれること、さらに演述型は 3 つの下位タイプに分かれることを示す。

目次

0. 分析対象の確定
1. 問題提起
2. 先行研究
3. 考察
 - 3.1. 心的事態の特性とその発話機能
 - 3.2. 表出型
 - 3.3. 演述型
 - 3.3.1. 演述型 I：過去に経験された心的事態の描写
 - 3.3.2. 演述型 II：行為者が引き起こす心的事態の描写
 - 3.3.3. 過去分詞形とその発話機能
4. 結論と残された問題

0. 分析対象の画定

- ・ 心理動詞は心的事態を経験する経験者の統語的位置から3つのタイプに分類される。
 - (1) 主語型
Pierre méprise l'argent.
 - (2) 直接目的語型
L'argent dégoûte Pierre.
 - (3) 間接目的語型
Ce pull me plaît.

- ・ 本研究では直接目的語型心理動詞とその過去分詞形を分析対象とする。
 - (4) Ça m'énerve.
 - (5) Je suis énervé.

- ・ 心的事態は、認識、思考、喜怒哀楽など、様々な下位タイプを区別することができる。喜怒哀楽を表す心理動詞(感情動詞)と、身体部分で経験される痛みや痒みなどの感覚を表す心理動詞(感覚動詞)を分析対象とする。
 - (6) 感情動詞
 - a. Ça m'énerve. (=4)
 - b. Ça m'amuse.
 - (7) 感覚動詞
 - a. Ce pull me gratte.
 - b. Ça me pique.

1. 問題提起

- ・ 問1：直接目的語型心理動詞は、現在形では人称制約があるが、過去形では人称制約が解除されるのはなぜか。
 - (8) a. Ça m'énerve !
b. ??Ça l'énerve !
 - (9) a. Ce film m'amuse !
b. ? Ce film l'amuse !
 - (10) a. Ce pull me gratte.
b. ??Ce pull le gratte.
 - (11) a. Ça m'a énervé.
b. Ça l'a énervé.
 - (12) a. Ce pull m'a gratté.

(Ruwet1994)¹

¹ Ruwet (1994) では、1人称と3人称に加えて2人称の例も挙げられており、その容認度は3人称のそれより低いと判断されている (e.g. ?? Ce film t'amuse.)。2人称が容認されないのは3人称が容認されないこととは別の語用論的問題が関わると考えられるので、本研究の分析では2人称の現象は扱わないことにする (cf. Dhome1998)。

b. Ce pull l'a gratté.

- ・ 問2：(8)、(9)、(10)と(11)、(12)の対比から、直接目的語型心理動詞は他動詞形で1人称、現在形の場合に何らかの特異性を持つことが予測される。その特異性は、(13)のような過去分詞形の1人称、現在形のケースにも認められるのか。そうではないとしたら、(8)や(9)と(13)の間にはどのような違いがあるのか。

- (13) a. Je suis énervé.
b. Je suis agacé.

2. 先行研究

- ・ 直接目的語型心理動詞：統語構造分析、意味構造分析 (cf. Belletti&Rizzi1988, Bouchard1995, Petesky1995, Ruwet1972, Voorst1992, 丸田 1998)²。

- (14) 目的語型心理動詞の語彙概念構造の鋳型
[x ACT ON y] CAUSE [BE [y PSYCHOLOGICAL STATE]] (丸田 1988)

➤ 時制、人称の問題を扱えるアプローチにはなっていない。

- ・ 過去分詞形：品詞転換のメカニズム分析 (cf. Levin&Rappaport1986, 丸田 1998, 丸田&平田 2001)。

- (15) 形容詞的受動形の派生メカニズム
受動化→形容詞への転換 (conversion) (Levin & Rappaport1986)

➤ 人称、時制の問題が問われることはない。

- ・ 定義に関わる分析 (cf. Ruwet1993, 1994, 1995)。

- (16) 真の心理動詞の特徴
La lecture d'Homère passionne Maxime. (Ruwet1994)

志向対象 志向主体

➤ 志向性分析に、時制、人称の問題を(そのまま)組み込むことはできない。

3. 考察

3.1. 心的事態の特性とその発話機能

- ・ 喜怒哀楽と痛みや痒みなどの心的事態は、いま・ここ・私において経験される。
 - 日本語の心理述語ではこの特徴が構文論的制約として働く (cf. 益岡 1997, 山岡 1998, 2000)。
- (17) a. 私は胸が痛む。
b. *彼は胸が痛む。 (山岡 2000)
- ・ 発話機能は大きく「演述 (assertive)」、「指動 (directive)」、「宣言 (declaration)」、「表出 (expressive)」

² 当初、項が担う意味役割と統語構造の間には密接な関係があると考えられ、その関係はリンキング規則と呼ばれていた。リンキング規則に従うと、経験者役割を担う項は、主語位置に投射されることになっていたが、直接目的語型心理動詞はこれに反するために問題になってきた (cf.丸田 1998)。

の4つに分けられる (cf. Austin1976, Bühler1934, Searl1979, Jakobson1963, 山岡 2000)。

- (18) a. 演述機能：何らかの命題内容を聴者に伝達する
b. 表出機能：話者の現在の感情状態(情意・感覚・思考など)を直接に言語化する

(山岡 2000)³

- 「いま・ここ」の「私」が経験する心的事態の言語化≡「表出機能」
- 1人称経験者、現在形(非過去形)が表出機能の発現を支える構文論的条件となる⁴。
- 表出機能を持つ文に含まれる心理動詞を「**表出型**」と呼ぶことにする。

・ 現在形(非過去形)から過去形に変えると人称制約が解除される。

- (19) a. 私は胸が傷んだ。
b. 彼は胸が傷んだ。

- 発話機能は表出機能から演述機能へとシフトする。

- (20) a. これらの手法は、最新の手法と比較すると手間がかかり、測定にはある程度の熟練を要した。

b. 総て馬鹿さの感じが、漲ってるじゃないか。 (山岡 2000)

- (19)「胸が痛む」と(20)「要する」、「漲る」は機能的に同じ。
- 演述機能を持つ文に含まれる心理動詞を「**演述型**」と呼ぶことにする。

3.2. 表出型

・ フランス語の直接目的語型心理動詞では現在形において人称制約はないように思われる。しかし、1人称と3人称では機能面で異なる特徴を持つ。

- (21) a. La lecture d'Homère me passionne.

- いま・ここの発話者の心的事態を表出する。

b. La lecture d'Homère passionne Maxime.

(Ruwet1994)

- 他者が経験する心的事態を描写する。

・ 感嘆符の解釈と文機能的違い。

- (22) a. La lecture d'Homère me passionne !

- 発話者がいま・ここで感じている心的事態を強調する。

b. # La lecture d'Homère passionne Maxime !

- 3人称が経験する心的事態に対する発話者の驚きを表す。

³ 山岡(2000)は発話機能とは別に、「聴者を前提とせず、発話の素材である文が話者から発話されることそれ自体における機能」を立て、これを文機能と定義する (ibid. :62)。しかし、文機能と発話機能の定義に矛盾が見られること、加えて、本研究の分析では2つの機能を区別する必要性はないので、本研究では山岡(2000)の文機能に関する議論を発話機能の問題に回収して進める。

⁴ 日本語心理述語文の表出機能を支える構文論的条件には、この他に「述語が感情性述語であること」、ヨウダなどの「モダリティ付加辞を接続しないこと」、「アスペクト接辞-tei-を接続しないこと」が挙げられている (山岡 2000 :87)。後者2つの条件はフランス語の現象には直接的には関与しないので本研究では取り上げない。

(「#」：発話者の発話時の内的状態を強調する解釈が生まれないことを示す)

- ・ 表出機能を持つ言語現象は、非意図性、聞き手不在という特徴と親和性を持つ (cf. Ameka1992, Haiman1989, Kliber2006, Wierzbicka1992)⁵。

(23) a. わあ！
b. Ah！

- ・ 聞き手への情報伝達を意図せずに、話者が感じる心的事態が表現される状況 A を設定し、選択されやすい構文タイプを調査する⁶。

➤ 状況 A：自室で 1 人、パソコンに新しいソフトをインストールしようとしたところ、フリーズしてしまい作業が進まず、イライラとを感じる。

(24) a. Merde！
b. Ça m'énerve！ / Ça m'agace！
c. ?? Je suis énervé. / Je suis agacé.

- (24b)の énerver や agacer は、表出機能を持つ典型的な現象現象である間投詞に近い機能的特徴を持つ。
- **表出型**の直接目的語型心理動詞。

- ・ 現在形、1 人称代名詞の目的語型心理動詞が、聞き手が存在しない場面で話者の内的状態を表すために使用されている例。

(25) (a-i)—Raaaaah, ça m'énerve, ça m'énerve！

Je suis dans le salon, assis sur le canapé à ne rien faire d'autre que me triturer les méninges avec mes questions sans réponses. et puis Charles qui ne répond pas, ce qui commence à m'inquiéter.

(b-i)—Je ne sais pas ce que tu as, mais tu devrais aller prendre l'air et respirer un peu. Tu deviens tout bleu, Konstantin.

(a-ii)—Ah. Ah. Ah. Je suis pilé, Artemy. Vraiment.

(b-ii)—Allez, arrête, j'essaie de te déridier. (...) (Ciel de printemps-intégrale)

- ・ 直接目的語型心理動詞の表出型は(26)の構文論的特徴を支えとする。

(26) 表出型の構文論的条件
a. 主語：非行為者⁷

⁵ 間投詞は機能的に均一ではなく、感情性間投詞、意図性間投詞、認知的間投詞などが区別されるが、本研究で取り上げる間投詞は主に話者の内的状態の発露を表す感情性間投詞であることを予め断っておく (cf. Wierzbicka1992).

⁶ 作例に基づく例文の検証では2つのフランス人インフォーマントに容認度や解釈上の判断を依頼した。

⁷ 主語に ça を取る本文内の例(24b)は、間投詞による一語文(23b)や(24a)に近い機能を持つ。ところが、主語が非行為者であるが、具体的な指示対象を主語に取る例(21)は、独り言性や非意図性が小さくなり、その表出性は(24b)のような発話よりも小さくなると思われる。この違いを踏まえると、主語が非行為者である場合の意味的特徴に関してはより詳細な分析が必要であるが、この問題は今後の検討課題とする。注 8 も参照のこと。

- b. 人称代名詞：1 人称
- c. 時制：現在形

3.3. 演述型

3.3.1. 演述型 I：過去に経験された心的事態の描写

- ・ 現在形から過去形へ変えると人称制約が解除される。

(27=(8)) a. Ça m'énerve !

b. ??Ça l'énerve !

(28) a. Ça me tire, ce travail !

b. ??Ça le tire, ce travail !

(29=(10)) a. Ce pull me gratte.

b. ??Ce pull le gratte.

(30) a. Ça m'a énervé.

b. Ça l'a énervé.

(31) a. Ça m'a tirillé, ce travail.

b. Ça l'a tirillé, ce travail.

(32) a. Ce pull m'a gratté.

b. Ce pull l'a gratté.

- 1 人称の例は過去の自己に起こった出来事を描写する(=演述機能の前景化)。

- ・ 文(30)~(32)に含まれる直接目的語型心理動詞を**演述型 I**とする⁸。

(33) 演述型 I の構文論的条件

- a. 主語：非行為者
- b. 人称代名詞：制約なし
- c. 時制：過去形

- ・ 表出型と描写型の 1 人称代名詞は異なる意味論的性質を持つ。

- 発話者自身の概念化の問題は言語化の有無において問題にされてきた(cf. Langacker1990, 2008, 中村 2016)。

(34) a. Vanessa is sitting across the table.

⁸ 演述型には「人称代名詞：制約なし、時制：制約なし、主語：非行為者」を構文論的条件とするタイプも一つの下位タイプとして含まれると考えられる。本文で提示した例(21)は、発話の状況次第によってはこのタイプに含まれる。その場合の解釈は、3 人称の場合は、推測に基づいた他者の心的事態を表し(cf. Ruwet1994)、1 人称の場合は、自己が経験する心的事態を他者に説明するものとなり、いずれも発話機能は演述型となる。

(a) La lecture d'Homère passionne Maxime. 「ホメロス(の作品)を読むことに彼は熱中しているようだ」

(b) La lecture d'Homère me passionne. 「ホメロス(の作品)を読むことに私は熱中しているの」

このタイプは主語が非行為者であるに加えて、それが具体的な指示対象を持つ名詞句であるという特徴を有する。これに対して具体的な指示対象を持たない *ça* を主語とする *Ça m'énerve !* のような発話は演述機能よりも表出機能を持ちやすいと考えられることから、主語の性質に関してはより詳細は検討が必要である。この問題は今後の課題とする。

b. Vanessa is sitting across the table from me. (Langacker1990)

- 直接目的語型心理動詞／表出型の1人称代名詞は3人称に置き換えることができない。
⇒心的事態をその内部から捉える発話である。
⇒発話者の客体化の度合いは低い⁹ 10。
- 直接目的語型心理動詞／演述型の1人称代名詞は3人称に置き換えることができる。
⇒心的事態をその外部から捉える発話である。
⇒発話者の客体化の度合いは高い。

3.3.2. 演述型 II：行為者が引き起こす心的事態の描写

- ・ 主語に非行為者を取る表出型、演述型 I は直接目的語の topicality が高い。

(35) Givón(1976)、項の topicality を左右するパラメータ

high	>	low
Human	>	non-human
More involved participant	>	less involved participant
(AGENT > DATIVE > ACCUSATIVE)		
1 st person	>	2 nd person > 3 rd person

(36) a. Ça m'énervé ! (=8) 「(私は)イライラする」 > 「それが私をイライラさせる」
b. Ça m'a énervé. (=30a) 「(私は)イライラした」 > 「それが私をイライラさせた」

- 文解釈の焦点が直接目的語に置かれる人間の心的状態にある。

- ・ 主語に行為者が置かれると文解釈の焦点が主語にシフトする。

- 状況 B：園児 Marie が遊具で遊んでいる。別の園児 Paul がやってきて、Marie の遊具をとりあげ、Marie の遊びを邪魔しようとする。

(37) Madame, Paul m'embête !

- Paul が私に対してしていることを描写する働きを持つ。発話者である私が感じている内的状態を表出する機能は低い。
⇒表出機能 < 演述機能
- 主語が行為者となる直接目的型心理動詞を**演述型 II** とする¹¹。

⁹ 感情動詞では1人称代名詞は常に明示しなければいけないが(以下(1))、感覚動詞では1人称代名詞を明示しなくても容認される場合がある(以下(2))。感情動詞と感覚動詞の間に見られるこのような違いについては稿を改めて論じる。

(1) a. Ah, ça m'énervé !. ??b. Ah, ça énerve !

(2) a. Ah, ça pique ! b. Ah, ça me pique !

¹⁰ 言語化された1人称代名詞が特殊な意味論的特徴を持ちうることは、春木(2014)でも示唆されている。春木(2014)では以下(1)に含まれる1人称代名詞 me は「指示的には認知主体に結びつくが、発話内では dans le dos などと同じく、事態の起こっている場(...)を表しているのであって、認知している主体を表しているのではない(ibid. :72、脚注 24)」と分析する。

(1) Ça me gratte dans le dos.

¹¹直接目的語型心理動詞の中で行為者を主語に取ることができるのは、喜怒哀楽などの感情を表す心理動詞だけで、感覚を表す動詞では行為者主語を取ることができない。gonfler, couper が直接目的語型心理動詞として使用される以下の例を比較してみる。

(1) Madame, Paul me gonfle ! 「先生、ポールがイライラさせてくる」

(2) a. Ça me coupe le visage. 「顔がヒリヒリする」

- ・ 演述 II は人称制約がない。

(38) Madame, Paul l'embête !

- 1 人称は客体化された発話者を表し、3 人称と同じ意味論的性質を持つ。

- ・ 演述型 II は時制制約がない。

(39) a. Madame, Paul m'a embêté !

b. Madame, Paul l'a embêté !

(40) Jean a délibérément amusé Pierre.

(Ruwet1972)

- ・ 演述型 II は(41)の構文論的特徴を支えとする。

(41) 演述型 II の構文論的条件

- a. 主語：行為者
- b. 人称代名詞：制約なし
- c. 時制：制約なし

3.3.3. 過去分詞形とその発話機能

- ・ 直接目的語型心理動詞の過去分詞形は 1 人称、現在形で表出機能を持つか(⇒問 2 改訂版)。

- 状況 A では経験者が直接目的語に置かれる他動詞形が好まれる(3.3.2.節)。

(42) a. ??Je suis énervé !

b. Ça m'énerve !

(43) a. ??Je suis embêté !

b. Ça m'embête !

- 経験者が主語に置かれる過去分詞形は表出的発話と親和性が低い。

- ・ 直接目的語型心理動詞の過去分詞形は、演述機能と親和性が高い。

- 間投詞 Ah の解釈の特徴。

(44) a. Ah, je suis énervé ! ⇒ ≡désolé(e)

b. Ah, ça m'énerve !

- 間投詞 Ah の désolé(e)への置き換え可能性。

(45) a. Désolé, je suis énervé ! ⇒聞き手に対して自己の心的状態を説明する(≡演述機能)

b. Paul me coupe le visage. 「ポールが私の顔を斬りつける」

(1)は Paul の行為を描写することに解釈の軸が置かれるが、この文で gonfler は「膨らませる」という物理的事態を表す動詞としてではなく、比喩的拡張によって「イライラさせる」という心的事態を表す心理動詞として機能している。ところが、身体部分で知覚される感覚を表す例では、(2a) の非行為者主語では「顔がヒリヒリする」という感覚を表すが、(2b) の主語行為者の場合、Paul が私の顔を斬りつけるという物理的解釈が優先され、「ヒリヒリする」という内的状態の解釈は後退し、感覚を表す心理動詞として機能しない。感情と感覚を表す心理動詞間で見られるこのような違いについては稿を改めて論じる。

b. ?? Désolé, ça m'énerve !

- 聞き手の存在と過去分詞形の選択。

(46=(25)) (a-i)—Raaaaah, ça m'énerve, ça m'énerve !

Je suis dans le salon, assis sur le canapé à ne rien faire d'autre que me triturer les méninges avec mes questions sans réponses. et puis Charles qui ne répond pas, ce qui commence à m'inquiéter.

(b-i)—Je ne sais pas ce que tu as, mais tu devrais aller prendre l'air et respirer un peu. Tu deviens tout bleu, Konstantin.

(a-ii)—Ah. Ah. Ah. Je suis pilé, Artemy. Vraiment.

(b-ii)—Allez, arrête, j'essaie de te dérider. (...)

- 過去分詞形が演述機能と親和性が高くなる要因。

- 主語は目的語よりも topicality が高い (cf. Givón 1976, 2001)。
- 経験者主語の topicality > 経験者直接目的語の topicality¹²。

(47) a. Je suis énervé(e). 「イライラしているんだ」
⇒ 「私」の心的状態の説明(=聞き手目当ての発話)。
⇒ 演述機能が前景化する。

b. Ça m'énerve. 「イライラする」
⇒ 「私」は説明を付与されるほど topicality は高くない。

(48) Au bout d'en temps interminable, la bonne femme de la réception est enfin sortie de la pièce du fond, avec l'air affreusement revêche de quelqu'un qu'on tire du sommeil.

« Je suis embêtée, parce que la femme qui loge dans la chambre à côté de la mienne est venue me voir, toute nue, en me disant qu'on l'a mise à la porte... »

(Dur, dur)

- 発話者が置かれた心的状態の説明

- 人称や時制が変わっても演述機能に変化はない。

(49) Une fois que l'auto a démarré, j'ai demandé à mon père : « Pourquoi tu as pris la petite voiture ? Je t'avais dit de venir avec la fourgonnette !

— C'est ta mère qui l'a prise pour aller à l'hôpital. Elle est perturbée à cause de la fatigue, alors elle a dû monter dedans sans réfléchir.

(Dur, dur)

- 母親が置かれた心的状態とその原因の説明

(50) Le ciel, d'un bleu pâle mêlé de blanc, avait cette couleur indéfinissable qu'on ne voit qu'à Tôkyo. Les arbres tendaient frileusement leurs branches dénudées, et avec leurs manteaux noirs les gens qui déambulaient entre les tombes faisaient penser à des corbeaux. Je ne sentais pas le froid. J'étais soulagée que Sakai soit là. Il était vivant, cela suffisait à me rassurer.

(Dur, dur)

¹² 1 人称経験者の統語的位置と発話機能の関係は「属性叙述／事象叙述」の問題とも密接に関わると考えられるが、この問題については今後の検討課題とする(cf.益岡 1987)。

➤ 発話者が過去に感じた心的状態の描写

- 直接目的語型心理動詞の過去分詞形を**演述型 III**とする。

(51) 演述型 III の構文論的条件

- 主語：経験者 (過去分詞形)
- 人称代名詞：制約なし
- 時制：制約なし

4. 結論と残された問題

- 問 1：直接目的語型心理動詞は、現在形では人称制約があるが、過去形では人称制約が解除されるのはなぜか。

➤ 直接目的語型心理動詞が含まれる文の発話機能に注目すると、主語が非行為者で、現在形が選択される場合、当該発話は発話者が発話時において感じられる心的事態を表す表出機能と結びつきやすく、そのために、1人称という構文論的制約が課せられる(⇒表出型)。

➤ 直接目的語型心理動詞が過去形に置かれると、主語が非行為者の場合、文全体は発話者の発話時の心的事態の表出ではなく、過去のある時点においてある経験者が経験した心的事態を情報として伝達する演述機能が前景化する。演述機能には、「いま・ここ」「私」という縛りがないので、人称制約が解除される(⇒演述型 I)。

➤ 表出型、演述型 I は、いずれも主語に非行為者を取るタイプで、文解釈の焦点は直接目的語に置かれる経験者にある。主語に行為者が置かれると、文解釈の焦点は行為者にシフトし、「行為者が何かをしたのか」を伝えることを主たる機能とする文になる(⇒演述型 II)。語彙の意味は心的内容を表すが、その機能は行為動詞のそれと変わらない。

(51) a. Madame, Paul m'embête ! (=37)

b. Madame, Paul me tire le bras !

- 問 2(改訂版)：直接目的語型心理動詞の過去分詞形は 1 人称、現在形で表出機能を持つか。

➤ 経験者が主語に置かれる過去分詞形は、経験者が直接目的語に置かれる場合よりもその topicality が高くなる。表出機能ではなく、経験者がどのような心的状態にあるのかを説明し、伝達する機能が前景化する。

(52) 直接目的語型心理動詞の機能的分類とその構文論的特徴

		主語	人称	時制
表出型		非行為者	1 人称	現在形
演述型	I	非行為者	制約なし	過去形
	II	行為者	制約なし	制約なし
	III	経験者 (過去分詞形)	制約なし	制約なし

- 課題 1：直接目的語型心理動詞の機能的分類と意味構造の関係。
 - (53) a. *Jean a délibérément amusé Pierre toute la journée. (演述型 II)
 - b. Cette émission télévisé m'a amusé toute la journée. (演述型 I)
 - 継続を表す時間副詞句との共起関係が機能タイプによって異なる。
 - 継続を表す時間副詞句は動詞の意味構造の一部を修飾するので、直接目的語型心理動詞の機能分類は意味構造の問題と関係していると考えられる (cf.中村 2003)。

- 課題 2：非行為者を主語とする構文の発話機能の検討。
 - (54) a. Ça m'énerve !
 - b. La lecture d'Homère me passionne !
 - (54a)のほうが(54b)よりも表出性が高いと考えられる。

- 課題 3：主語型、間接目的語型心理動詞も含めた心理動詞全体の機能的考察。
 - (55) Pierre méprise l'argent. (=1)
 - (56) Ce pull me plaît. (=3)

参考文献

- Ameka, F. (1992), “The meaning of phatic and conative interjections”, *Journal of Pragmatics* 18, 245-271.
- Austin, J.-L. (1962), *How to Do Things with Words*, Oxford, Clarendon Press.
- Belletti, A. & Rizzi (1998), “Psych-verbs and θ -theory”, *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.
- Bühler, K. (1934), *Sprachtheorie Die Darstellungsfunktion der Sprache*, Gustav Fischer Verlag. [脇坂豊, 植木迪子他訳(1983)『言語理論(上)—言語の叙述機能』クロノス]
- Bouchard, D. (1995), *The Semantics of Syntax: A Minimal Approach to Grammar*, Chicago, University of Chicago Press.
- Dhorne, F. (1998), “La structure linguistique d’une sensation”, *Japon Pluriel* 2, Philippe Picquier, 313-319.
- Givón, T. (1976), “Topics, pronoun and grammatical agreement”, C. Li (ed) *Subject and Topic*, New York, Academic Press, 149-189.
- Givón, T. (2001), *Syntax I*, John Benjamins.
- Haiman, J. (1989), “Alienation in grammar”, *Studies in Language* 13/1, 129-170.
- 春木仁孝 (2014) 「ÇA を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48, 63-84.
- Jakobson, R. (1963), *Essais de linguistique générale*, Minuit. [田村すゞ子他訳(1973)『一般言語学』みすず書房]
- 川上夏林 (2022)『フランス語心理動詞の認知意味論的研究—感情動詞と感覚動詞のイベント構造について—』, 博士論文, 京都大学.
- Kleiber, G. (2006), “Sémiotique de l’interjection”, *Langages* 153, 10-23.
- Langacker, R. (1990), “Subjectification”, *Cognitive Linguistics* 1/1, 1-38.
- Langacker, R. (2008), *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, New York, Oxford University Press.
- Levin, B. & M. Rappaport (1986), “The formation of adjectival passives”, *Linguistic Inquiry* 17, 623-661.
- 丸田忠雄 (1998)『使役動詞のアナトミー —語彙的使役動詞の語彙概念構造—』松柏社.
- 丸田忠雄, 平田一郎著 (2001)『語彙範疇 (II) : 名詞・形容詞・前置詞』研究社.
- 益岡隆志 (1987)『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
- 中村捷 (2003)『意味論—動的意味論—』開拓社.
- 中村芳久 (2016)「Langacker の視点構図と(間)主観性」中村芳久, 上原聡編『ラネカーの (間) 主観性とその展開』開拓社, 1-51.
- Petesky, D (1995), *Zero Syntax: Experiencers and Cascades*, Cambridge, MIT Press.
- Postal, P. (1970), “On the surface verb *remind*”, *Linguistics Inquiry* 1/1, 37-120.
- Ruwet, N. (1972), *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Paris, Seuil.
- Ruwet, N. (1993), “Les verbes dits psychologiques ; trois théories et quelques questions”, *Recherches Linguistiques* 22, 95-124.
- Ruwet, N. (1994), “Être ou ne pas être un verbe de sentiment”, *Langue française* 103, 45-55.
- Ruwet, N. (1995), “Les verbes de sentiment forment-ils une classe distincte dans la grammaire ?”, H.-B. Shyldkrot & L. Kupferman (eds.), *Tendances récentes en linguistique française et générale*, John Benjamins, 345-362.
- Searl, J. (1979), *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Togo, Y. (2006), “Les verbes de sentiment en français en japonais : autour de la prédication épistémique”, J.

- Kawaguchi, K. Kida & M. Maejima (eds), *Cognition et émotion dans le langage*, Keio University Press.
- Voorst, J.-V. (1992), “The aspectual semantics of psychological verbs”, *Linguistics and Philosophy* 15, 65-92.
- Wierzbicka, A. (1992), “The semantics of interjection”, *Journal of Pragmatics* 18, 159-192.
- 山岡政紀 (1998) 「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文学』8, 創価大学, 1-17.
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版.